

ボリス・ペルガメンシコフ 公開マスタークラス 開催される



去る11月20日、サントリーホール小ホールにて、ボリス・ペルガメンシコフ氏の公開マスタークラスが、招聘元の神原音楽事務所様のご協力のもとに開催されました。

当日は、あいにくの雨模様となってしまいましたが、熱心かつ温かみのあるペルガメンシコフ氏の指導に、来場された多くの方が感銘を受けた様子でした。

■ 受講生と受講曲 (演奏順)

朝吹 元:ドヴォルザーク「チェロ協奏曲 ロ短調」第1楽章

池村 佳子:ベートヴェン「チェロソナタ 第3番」第1楽章

上森 祥平:ブラームス「チェロソナタ 第2番」第1楽章

■ 講習概要

マスタークラスの内容を簡単ではありますが、お知らせいたします。

朝吹さんの演奏を聴いたペルガメンシコフ氏は「18歳という年齢を考えると、軽やかかつ品がある演奏で素晴らしい」と誉められた後、「響きを使って音楽を表現すること」について述べられました。

○フレーズの最後の音が、ハサミで切るように終わっているが、例えて言えば、ジーンズを切った時に先に出てくる屑のように音を残す。音を残すことによって、休止の中でも音楽を更に響かせ、奥行きを出すことができる。さらに、どんなに細かい音にもビブラートをかけることによって、音に躍動感を持たせる。

○(音階をビブラートで弾かせた後に)音が変わるときに音を止めてしまっている。同じことが曲中でも起きているために、音が死んでしまっている。常にビブラートをかけることによって、音が単一的に聞こえてしまうのを避けることができる。

ビブラートのテクニックが単一なので、音が単調になる。ハイポジションの時は親指を指板から離したり裏側に持ってきてみたり、指の押え方も、例えば指先の肉がたくさん弦に触れるように工夫するなどして、あらゆる可能性を試してみたら良い。

○曲の最初の部分は躍動感が大事。音をつぶさないためにも、弓と弦とのコンタクトのみを意識し、上から押さえつけないように。

○上行形も下行形もポルタメントをかけていた点を指摘。音楽の自然な流れを考えると上行形の時はあまりかけない方が良い。逆に下行形の時は自然な場合が多い。

続く、池村佳子さんには、「私の誤解かもしれないが」と前置きした上で、演奏から「感激」や「感動」が欠けているように聞こえると指摘。この曲の中に含まれる、あらゆる要素を表現していくべきであるというコメントをされました。

○2分の2拍子の曲だが、4分音符を一つ一つ押して弾いているので、4分の4拍子に聞こえる。

○この曲の出だしは、当時の音楽としては革命的である。ピアノが入ってきて初めてイ長調の曲と分かる。最初からイ長調と確信して弾かずに、途中まで模索している状態で続け、聴衆に驚きを与えるように弾くと良い。

○全く平らかに弾くと音楽の方向性が無いため、単調になり、フレーズがわかり辛くなる。色々なフレージングが考えられるが、実際に自分で歌ってみるとよくわかる。

○曲の中のスケールでスラーのかかった部分の時、右手も左手も常に先へ先へと腕や指の準備をしつつ進行していくと、もっとスムーズに流れる。

心がけて欲しいのは、深い呼吸の中から自然に音楽をだすことというアドバイスで締めくくりました。

3人目、上森さんのレッスンではピアノ伴奏との調和にも言及されました。



- ダイナミックスの変化がまだ十分でない。ピアノシモはよいがメゾフォルテ・フォルテ・フォルテシモは不十分である。
 - 演奏からはヘ長調というより、ヘ短調の曲であるかのような印象を受けた。曲の冒頭部分は「海岸の林が海からの風になる」イメージ。木は風に立ち向かうのではなく、どんな方向からの風にもしなる。音楽は常に自然と一体化していなければならない。加えて、闘うように弾くよりも、むしろ「喜びが誇りにかわるような」感じで弾くと良い。
 - フォルテの時に、弓を立てて毛を全部つけると、厚みのある音になる。
 - チェロだけでなく、ピアニストや指揮者の動きをみてもわかるように、手先だけでなく身体全体で音楽することが大事である。縮こまらず大きな息で音楽することを心がけるように。
 - 第1楽章冒頭に16分音符の形が多くでてくるが、全てを同じように弾いてしまうと単調になるので、たっぷりと長めに弾いてみたり、32分音符のように弾いてみたり、色々と変化をつけて弾いてみる。
 - チェロがソロの役割を捨ててピアノと一体となる部分については、弓をたくさん使ってピアノの中に溶け込み、あたかも一つの楽器であるかのようにする。
 - A線とD線の移動が連続した際に、D線を弾いている時の角度で肘を固定してしまうと、より手首を使って弓を動かさなくてはならなくなる。A線にあたる角度において弾くと、手首を使いやすく、少ない運動で済む。C線のFとG線のAsの場合も同じ。C線を弾く角度より少し高めに肘を取ることによって動きを小さくできる。
- レッスン後、総じて、水準が高く素晴らしいとのこと言葉を頂きました。

■ 受講者の感想



弾いてみて頂きたかったです。

ボリス・ペルガメンシコフ先生はとても温かいオーラをお持ちの方で、僕はドイツ語は分からなかったのですが、先生の実演と寺谷さんの通訳とで、とてもわかりやすく教えて頂きました。贅沢を言わせて頂くなら、先生御自身のチェロで

最初に通して弾いた時に舞台ではなくて、客席にいて下さるといのは、普通の公開レッスンではなかなか無いことで、先生が客席で聴いて下さったのは、大変うれしかったです。

今回のレッスンではビブラートや発音の仕方など、これからの課題をたくさん設けて下さいました。実は公開レッスンの2日後、先生が「ロココの主題による変奏曲」を演奏されるとのことで、聴きに行ったのですが、とても素晴らしかったです。部分部分での音色やビブラートの変化はもちろん、フレーズがすごく大きくて長いことなど、公開レッスンで僕が教わったことを、そのまま演奏して頂くことで、また教えて頂いたような気がしました。

サントリーホールの小ホールで弾けたこともまた、大きな収穫でした。ホールいっぱい響かせることを勉強していくつもりです。

先生から教わったたくさんのことをもらさず、自分のものにしたいです。これからも頑張ります。

朝吹 元

*



これまで私は公開レッスンというものをあまり経験してこなかったこともあり、今回は少し緊張する反面、45分という限られた時間の中で自分がどんな刺激を受けることができるのか楽しみにしていました。

1楽章の中で技術的に問題がある点、新しい音楽的解釈など、先生の質問によって気付かされたことが多くありました。また、普段から自然な呼吸と共に演奏することを心がけてはいるのですが、先生の出される音の広がりや耳にして、もっと意識的に訓練しようと強く思いました。

このような貴重な機会を与えて下さった日本チェロ協会の先生方、事務局の皆さんに心より感謝申し上げます。

池村 佳子

*



ペルガメンシコフ氏とは以前、ドイツでお会いしたのですが、今回もその時と同様、氏の誠実なお人柄が伝わってきました。

受講したブラームスの2番のソナタでは、冒頭の部分について氏は「私はここは木が風に吹かれてし

なっている様子を想像します。それでいて幹はしっかりと立っているような。」と表現されました。この一言は、この曲をピアノとどのように動かしていくか悩んでいた私にとって、難解なパズルが一気に解けていくように感じられました。

音楽をここまでの確に、端的に捉える氏の洞察力にすっかり感激しました。音楽を選び抜かれた言葉で表現できるほどクリアに「わかる」のは、実は非常に難しいことです。でも、ここまで「わかって」こそ、初めて人に伝えられるのだらうな、と感じました。

今回学ばせて頂いたことを心に留めて、次のコンサートへの糧にしたいと思っています。

上森 祥平

第7回 チェロサロン

マスタークラスの一週間後、サントリーホール・リハーサル室にて第7回チェロサロンが開かれました。今年の養父町ビバホールコンクールで優勝されたベンジャミンさんの飛び入りもあり、始まる前から控室で早くも盛り上がっていた様子です。

冒頭、今回の主宰である上村昇先生の生徒さんによる模範演奏で幕を開けたサロンは、先生の穏やかな語り口とあいまって、終始なごやかな雰囲気でした。参加された会員の方の声を紹介します。

チャレンジ そしてリベンジにかける日々…

上園 哲司 (R-171)

今日は、8ヶ月ぶり、僕にとって3回目のチェロサロンでした。初めてのサントリーホールのリハーサル室。広いお部屋でチェロを弾けて、とても気持ちよかったです。めでたしめでたし。…それだけで終わるほど甘くありません。今回の「刺客」はチェロだけではありませんでした。

サロンが始まる前、待合室として使っていた楽屋で、Benjaminさんがバッハ無伴奏6番のガヴォットを演奏してくださいました。

パワフルで素晴らしい演奏だったので、たまたま知っていたドイツ語の単語でポロツと感想を言ったがために、そこからしばらくの間、ドイツ語の記憶の糸を手繰り寄せる為、普段眠っている脳みそをフル回転させることになってしまいました。

おかげで、今度の神戸の1000人チェロには出るのか（僕はチェロ歴3年ルールに引かかるので恐らく出られませんが）とか、彼の趣味であるカメラの話など、思わぬところで話が盛り上がり、ちょっとトクした気分でした。でも、ドイツ語をもっと話せるようにならねば…。

そんなわけで、全く油断ならないイベント、チェロサロン。「どのへんが？」って、経験も技術も無いに等しい僕には「全部」なんです。特にアンサンブルぶるぶる…。



初めてのサロンでのアンサンブル、自分が何をやっているのか分からないまま終わりました。

2回目。曲は予め分かっていたので予習しました。が、やっぱり「出来た」という実感の無いまま終わってしまいました。

そして今回。初見でのアンサンブル。しかも、アンサンブルの練習がメインのサロンになりました。

上村先生からの「(少なくとも)スラーは守れなくとも、楽譜どおりの拍だけはきちんと刻んで弾きましょう」とのご指示と、「楽器にも慣れてきたんだし、この曲のこの部分は、レッスンで〇回もさらった△△教則本の××ページの真ん中あたりと同様のパターンなんから、弾けない苦が無い。」という自信(?)を頼りに、演奏開始。

いちばん簡単なパートで、大抵はレッスンでお馴染みのパターンであるとは言え、レッスンでは未だお目にかかったことの無いポジションも押さえなければならぬ…。などと苦戦を強いられつつも、今回は何とかみんなについて行けたかな？

と、ちょっとだけ手応えを掴むことが出来たような気がします。

しかしその一方で、限られた時間の中で普段の練習曲の努力目標と同じ水準までプッシュ出来ない、というもどかしさを感じました。

何かが出来るようになったら、他の課題が提示される。チェロサロンと僕の関わりは、いつもサロンが星1つリード。「次回こそリベンジ!」を胸に、「教育的指導」を受けつつ、ひたすら練習曲の日々…。対戦成績を五分に持ち込むのは、いつのことやら…。

チェロサロン～キーワードは「楽しい」

村上 美樹 (R-182)

11月26日のサロンは、上村昇さんによるチェロ・ワンポイントクリニックでした。

初めに、バリエールのデュエットをお弟子さんのお二方が演奏し、それから、飛び入り参加(?)のドイツのチェリスト、Benjaminさんが演奏されました。

どちらの演奏も、大変にご自身が楽しんで弾いておられる様子が伝わってきました。

その後、クンマーのデュエットを参加者全員で合奏しましたが、上村さんも、「楽しかったですか?」とまず私たちにおっしゃいました。

初見ということもあり、目の前の楽譜に書かれていることを再現しようとするに必死になり、楽しむよりもちょっと苦しい自分

がいたことに気がきました。

おうちで個人練習をするときは、音程や、フィンガリング、スラーやトリルなど、通しで弾いていても気になると止めてもう一度やりなおすことができますが、合奏をしているときは、そこにばかりこだわってはいは、「せっかくの合奏の楽しみ」をふいにしてしまっているのではないだろうか、と感じました。

いろいろ具体的な質問や、ご指導もありましたが、一番感じたのは、「楽しく弾こう!」ということの大切さでした。言葉で説明なさったのではなく、上村さんの雰囲気から「楽しく弾くことがどれほど楽しいか」というのが実感できたように思います。

私がチェロを始めてちょうど4年、最初はあれほど弾くのが楽しかったのに、最近では苦しく、つらいことも増えてきた様に思

ます。今日のチェロサロンで、楽器を弾くことの原点を、そして、意味がちょっとわかったような気になりました。

次回チェロサロンのお知らせ

3月20日(火・祝) 16:00~(2時間程度)

サントリーホール リハーサル室

主宰: 毛利 伯郎

お話とアンサンブルが中心です。

弾きたい曲がある方は、ぜひ楽譜をご持参下さい!

有珠山復興支援チャリティー 1000人のチェロ・コンサート in 大分

去る11月18日(土)の午後、全国14都府県から60名余りのチェリストが集まり、高円宮様もわざわざ東京からご臨席下さいました。

会場は大分市内の市営「コンパルホール」の体育館でした。聴衆も二階席の定員をオーバー、急遽パイプ椅子で増席し、350数名となりました。

中には平松大分県知事のお姿も見えました。

2年前の1000人のチェロ・コンサートに参加、不参加等関係なくチェロアンサンブルの大好きな同好の志が参集したわけです。

前半は参加者全員によるアンサンブル。

曲目はクレンゲルのヒムヌス、フンクの組曲 ニ長調、ゴルターマンのレリジョーソ、スカララッチェのグラベとメヌエット、ラッヒナーのセレナーデ、吉丸一昌の早春賦、滝 廉太郎の花と荒城の月、三枝成章のレクイエム、そしてアンコールにはサンサーンスの白鳥、カタロニア民謡の鳥の歌を演奏しました。大分で初めて鳴り響く60のチェロの音色に聴衆もひと時酔いしれていただきました。

後半はチェロアンサンブルコンテストです。

デュエットから15人までの六組により競われ、審査委員長の指揮者の靄山氏を悩ますほどの接戦(?)でした。鑑賞された宮様も苦笑いするひと幕もあったり、還暦衣装での演奏あったりで和気藹々の中進められ、地元協賛の方々からトラフグセットをはじめ、大分特有の「一村一品」の豪華賞品をそれぞれに獲得し、参加者はご満悦のようでした。

打上げは近くのホテルで行われ、宮様、平松知事、協賛の方々参加者合わせて150名ほどで演奏(?)のねざらいと親交を深め合いました。

主管の労を取られた大分の白沢女史と支えられたスタッフの方々を囲んで宮様も参加者も夜のふけるのも忘れ、杯を酌み交わしました。

来年2001年7月26~29日に催される第2回1000人のチェロ・コンサートでの再会を誓ってお別れました。

松本 巧(R-78)

第1回パブロ・カザルス・チェロ・コンペティション報告

「クロンベルクはアーティストの創造スペース」とマルタ・カザルス・イストミン夫人の言葉が添えられて、2000年7月1日から11日までドイツ・クロンベルクで、第1回パブロ・カザルス・チェロ・コンペティションが開催されました。私は第2次から聴きましたが、7月にしては寒く、気温15.5℃という日もあって温かい紅茶であたたまるほどでした。参加資格は1985年生まれから1969年生まれまで。志願者は100名以上だったということですが、テープ審査で56名に絞られ、実際に出場したのは52名でした。ヨーロッパ、南北アメリカ、アジア、中東、22か国から集まり、プログラムには出場者全員、写真、国籍、年齢、そして選択した曲が紹介されています。

課題曲はその全部を書きますと、第1次が4曲あり、

(1) バッハ 無伴奏組曲プレリュード

第1番—第6番から選択

(2) ベートーヴェン ソナタC-Dur op.102の1から3・4

(3) a〜c から選択

a.ヒンデミット 無伴奏ソナタ op.25の3から3・4

b.グバイドゥリーナ プレリュード 2と8

c.ブリテン 無伴奏組曲第3番op.87から

7.レチタティーボ 8.モト・ペルベチュオ

9.パッサカリア

(4) ピアツェー カプリッチョ 第3番

これらを弾いたのち第2次に16名が選ばれ、順序は自由で3曲を演奏しました。

(1) ブリテン ソナタ C-Dur op.65

(2) ブラームス ソナタ F-Dur または e-Moll

(3) クリストバル・アルフテル (委嘱初演)

ソロ「傷ついた鳥の歌」

アルフテルは1930年マドリッド生まれの作曲家／指揮者で、この曲はカザルスの演奏したカタロニア民謡のアイディアを用いて、このコンペティションのために作曲されたもの。テクニク的にも音楽的にも難しく、それを4週間前に渡された出場者達が試される時です。中には遅れて2週間前だったという人も。(譜面は Wien, Universal Edition)

ここまででもハードルは高く、終わったあと「コンクールはもういい!」と言った人も。そんな中で上森祥平君はセミ・ファイナルまで残りました。

そして本選では室内楽と任意選択とコンチェルトの3曲

(1) シューベルト ピアノトリオ op.99 から第2楽章と

ベートーヴェン ピアノトリオ op.97 から第1楽章 から選択

(2) ソロ、オーケストラ、またはデュオ作品(5〜15分以内)から任意に選択

(3) ハイドン 協奏曲 D-dur と シューマン 協奏曲から選択

(共演はヨハネス・ゴリツキ指揮ドイツ・カママーミュージック・アカデミー)

本選には次の6名が選ばれ、2日間にわたっての競演になりました。(以下、演奏順)

3位 ガヴリエル・リブキン (イスラエル 1977)

5位 マーク・コソヴァー (USA 1976)

4位 ニクラス・エピンガー (ドイツ 1972)

1位 クラウディオ・ボルクェス (ドイツ 1976)

2位 タチャーナ・ヴァシリエヴァ (ロシア 1977)

6位 インバル・セゲフ (イスラエル 1973)

10日間の真剣勝負の審査をなさったのは、カザルス夫人、芸術監督のトレンクラー氏、作曲者のアルフテル氏、堤先生、ベルガー、ヤン・チャン・チョウ、クラレット、ホフマン、クリーゲル、メネセス、ベルガメンシコフの先生方。本選の審査員にショット・ミュージックのハンゼー・ストレッカー氏。審査員として費やされる時間は長く重いものがあります。

張り詰めた会場の空気が休憩時間にはどっとほぐれて笑いが広がった視線の先の審査員席に、ベルガー氏の2歳の坊やが来て拍手する可愛らしさが。

授賞式とガラ・コンサートはフランクフルトのアルテ・オーバーで満員の聴衆を前に行われました。1位には3万マルク、2位には2万マルク、以下6位まで賞金が授与され、1位にはカザルスのチェロを2年間貸与の特別賞がつき、プルド音楽祭に参加の機会が与えられます。他に、ブリテンのソナタの最も優れた解釈に対して特別賞(5千マルク)、コンクールのための作曲作品の最も優れた解釈に対しては、クロンベルク・ライオンズクラブからの特別賞(5千マルク)が授与されました。2次での演奏中ミスをして演奏しながら泣いていた1983年生まれのユン・ラン・リー(韓国)には「期待される人」のための弓がロストロポーヴィッチ財団から貸与されました。彼女に受賞の舞台でどう感じたかを聞くと、「4年後はぜひ!!」と強く思った様子。1位のボルクェスは日本でも「未来の巨匠」で演奏したことがあり、フランクフルトの地元ファンにお馴染みの人気者、2位のヴァシリエヴァは他のコンクールでも受賞したことは、このJCSニュースで知りました。

フランクフルト空港から電車で約40分、(中央駅からは20分)の小さな町、クロンベルクでのチェロ・フェスティバルは1993年以来、昨年で4回を数えました。なぜクロンベルク? という問いには、諸々の条件がいいことと、そもそもトレンクラー氏がクロンベルク在住で、室内楽を楽しむばかりでなく、(ご両親の企業入りをせずに)仲間達とアカデミーを立ち上げ、運営を蓄積して来られた結果と答えることが出来ます。彼は本当のアントレプレナーだと言われている。

トレンクラー夫人は韓国の方なので韓国勢が元気です。出場者はクロンベルクのマスタークラスで学んでいる人が多かった一方、全く初めて来た人達もいました。今回、日本人の姿が少なく、「唯一の日本人会員」の私は、少し寂しくもありました。確かにコンクールには問題点もあり、日本には居ながらにして優れた講習会があって、身近にいい先生がおられ、レベルの高い勉強が出来る状況ですが、次のカザルス・コンクールは2004年。奇数年の10月中旬にチェロ・フェスティバル、偶数年の9月下旬にチェロのマスタークラスが開かれています。この9月にもグリーンハウス、ヤン・チャン・チョウ、ヘルマーソン、の講師陣でマスタークラスが開かれました。また去る4月には「室内楽は世界を結ぶ」のコンセプトで、ゴドン・クレーメルと仲間達の室内楽マスタークラスが開かれました。また、例年6月にバシュメット、今井信子のヴィオラ・フェストが開催されます。(敬称略)

どうぞ機会をとらえて、クロンベルクを訪ねてみられては?

E-mail: info@kronbergacademy.de

HP: http://www.kronbergacademy.de

加藤 美千代(R-108)

情報コーナー

第2回 1000人のチェロ・コンサート開催!

神戸国際チェロフェスティバル
2001年7月26日～29日

世界中のプロ・アマのチェリストたちによる本格的なチェロのための祭典「第1回神戸国際チェロフェスティバル」がいよいよ来年7月、神戸で4日間にわたって開催されます。

公開レッスン・コンサート・ディスカッション・ワークショップ等々が予定されておりますが、そのイベントの一環として、指揮に山下一史さんを迎え、「第2回1000人のチェロ・コンサート」が開かれます。

開催日等は以下のとおりです。

日 時：2001年7月29日(日) 14:00～15:30

会 場：神戸ワールド記念ホール

主 催：第1回神戸国際チェロフェスティバル実行委員会
NPO国際チェロアンサンブル協会

参加費：8,000円(1000人のチェロ・コンサートのみ参加の場合)

※10,000円でフェスティバルのほとんどのイベントに参加
加頂けます。詳しくは実行委員会までご確認ください。

フェスティバルの詳細は、ホームページでもご覧頂けます。

【HP】<http://kobe-cello.com>

【E-mail】info@kobe-cello.com

参加申込受付は2001年1月9日からです。

お問合せ先:フェスティバル実行委員会

TEL 078-392-1194/FAX 078-392-1195

チェロ協会メンバーのコンサートのお知らせ

会員番号R-20 ルドヴィット・カンタさんのリサイタルが金沢・名古屋・東京にて2月に行われます。

同じく会員番号S-36 峰本更さんのリサイタルは3月に東京・名古屋・大阪にて開催です。詳細は同封しておりますチラシをご覧ください。

2001年に開催予定のチェロ関連公演

(カッコ内は問合せ先)

1月 イワン・クーチャー

(J & Jコンサートエージェンシー:0797-21-2386)

マリオ・ブルネロ (アリオン音楽財団:03-3400-5052)

5月 デヴィッド・ガメルガード(国際芸術連盟:03-3356-4033)

ダヴィッド・ゲリンガス(梶本音楽事務所:03-3289-9999)

ミシェル・シュトロス(Vc)&上田晴子(P)

(日本交響楽協会:03-5721-4621)

ミッシェル・マイスキー

(アスペン:03-5467-0081/神原:03-3403-8011)

6月 ピオトル・ツェギエルスキ(Vn)

&カジミール・コシュラーチュ(Vc)

(J & Jコンサートエージェンシー:0797-21-2386)

7月 ハイ=エ=ニ

(国際芸術連盟:03-3356-4033)

9月 オレン・シェヴリン(武蔵野文化事業団:0422-54-2011)

デニス・シャポヴァーロフ(オレンジノート:045-545-4316)

ヤーノシュ・シュタルケル(神原音楽事務所:03-3403-8011)

- 10月 スティーヴン・イッサーリス(梶本音楽事務所:03-3289-9999)
エドリアン・ブレンデル(梶本音楽事務所:03-3289-9999)
アリサ・ワイラースタイン(梶本音楽事務所:03-3289-9999)
- 11月 アレクサンドル・ブズロフ(ムジークレーベン:03-5548-7777)
ヤン・ソンウォン(アサクラコンサート企画:075-491-5971)
パスカル・ロジェ(P)&小林美恵(Vn)&長谷川陽子(Vc)
(アスペン:03-5467-0081)
- 12月 ミカ・ヴァエユリネン(アコーディオン) with 長谷川陽子(Vc)
(アスペン:03-5467-0081)
ハンナ・チャン(神原音楽事務所:03-3403-8011)

事務局より

※ 更新月を迎えた会員の皆様 会費の納入をお願いします

封筒の宛名部分に黄色のシールが付いている方は、既に更新を迎えた方々です。

12月入会の方………5000円

1～3月入会の方…2500円

今年は金額が例年とは変わりますので、ご不明の方は事務局までお問合せ下さい。

※ チェロに関する情報を募集します

最近聴いたコンサートの感想等、なんでも結構です。

また、会報誌上で特集して欲しいことなどがありましたら、ご要望をお寄せ下さい。

会報第11号 原稿・情報〆切 2001年2月28日(水)

掲載情報 4月7日(土)以降のもの

公演チラシ等、同送をご希望の場合は3月15日(木)まで事務局宛に送付をお願い致します。

※ 会員名簿を作成します

2001年度の名簿作成にあたって、頂いている個人情報に変更がある方は、お手数ですが、1月末までに事務局宛にご連絡下さい。

また、現名簿で不明点のある方は、事務局から確認のご連絡をさせて頂く場合もございますが、どうぞご了承下さい。

編集後記

ペルガメンシコフ氏のマスタークラスを聴講して、優れた指導者の言葉というものはジャンルを越えて、人のやる気を喚起させる力があるのだと実感しました。音楽に限らず、表現する楽しさや喜びというものを味わってみたいとなりました。日々の生活に追われて、何かに集中する時間というのが少なくなってきたように感じたことはありませんか? 来年はもう少し、生活にゆとりが欲しいと思う年の瀬です。21世紀もチェロ協会をよろしくお願い致します。

日本チェロ協会会報(JCS NEWS)第10号

2000年12月27日発行

発行:日本チェロ協会

東京都港区赤坂1-13-1 サントリーホール内

電話 03-3505-1001 FAX 03-3505-1007

発行人:堤 剛

編集:日本チェロ協会事務局

編集協力:リュウカンパニー